



### 兒童研究法

文學士

松本孝四郎講演

知覺作用に付いての注意

吾々は觀察といふことをよく言ひますが、此觀察と言ふのは、其時に心が注意の狀態をとり、之を繼續して實物に付ての知覺又は觀念を作るのを言ひます。幼兒が種々のものを觀察した結果は、知覺又は觀念となりて、幼兒の思想界を構成します。なほ追々發達すると、圖書に由て、丁度實物

に接したやうに、知覺又は觀念を作る、さて幼兒の觀察、知覺、觀念が如何に精密であるか、といふことは手細工物、畫、話しぶりなどに由て、判斷することが出来ます。即ちこれらのもので、幼兒の觀察した結果を知ることが出来ますが、之には記憶といふものがよほどまじつて居り、此記憶の度は子供に由りて大そうちがひがあります。又筋肉の運動のよく發達したるものとして居らぬもの巧なものと、巧でないのと、容易に疲れぬものと、疲れやすいものと種々あります。ですから、たとへば畫方に付て申しますと、一の直線を書かにしても、やすいのと六かしいのとがあります。幼兒を右きゝのものといたしまして、最もやさしいのは 次は 次は 最も困難なのは でありませう。此通り、同じ直線でも、

其方向に由て、幼児にはよほど六かしいのですから、たやすい直線に富むで居るものほど、幼児には書きやすいわけです、又曲線は、圓周的のものが幼児には書きやすいのです。

序に書方に付て申しますが、一体黒板に或物を書いて之を幼児の石盤の上に書かすといふのは地面に殆んど直角なる平面上のものとして、幼児に知覺させておいて、そうして、幼児が書く時には、地面に殆んど平行なる平面上に書かなければなりません。即ち異なる平面上に書くのですから、六かしいわけです。且つ、手本としては大きく見する故に、幼児は割合を縮小して、小さく書く必要がある。それで此大さの割合といふことにも、幼児の精神は費消される。又記憶が不完全ならば、手本を見て、之をおぼえて、そうして

書くのにもよほど骨が折れます。

故に、手本を示して書かす場合、殊に幼稚園の初によく注意すべきことは、幼児の筋肉運動の練習の順序を誤らぬやうにすべきことです。其順序はどうであるかといひますと、初は石筆も鉛筆も持たずに、指のみにて空中に練習するがよろしいでせう。即ち手本の書を、指にて自分の前の空間に書く、之を空中練習と稱します。此練習の利益は、手本と同じ平面上に書くことができること、又手本と同じ大きさにすることができること、又凡ての幼児をして同じことを同時に練習せしむることができ、などの利益です。但し、此時に注意すべきは、教へる人が兒童の指の運動を早すぎぬやうに注意することです。一体幼児はやゝもすれば、運動を早くしすぎるもので、早すぎると手

本のまねをすることが足りなくなる。ですから教へる人は、落付て靜に練習させることが必要です。又教へる人がかけどきをしながら、幼児に線をひかすことは利益があります。或人は、空中練習はわとが残らぬ故に、ゆるりと形を認むる能はず、不都合なりと言ふ。併し、之は誤で、空中練習は筋肉の練習を土臺として居るのですから、わとの形よりも筋肉の練習といふ目的は已に畫く時に達せられて居るのです。

さて空中練習の後はいかにするか、といふに次には机上に畫かせるのです。やはり只指でさせるのです。之は黒板と平面はちがひますが、前の空中練習をしたあとでは十分でできます。此机上の練習終りて後、石筆なり鉛筆なりを持ちて畫かせる。石筆と鉛筆との利害に付ては、一定した説はあ

りません。未定です。小學校では、追々石筆が少くなりましたから、小學校との連絡上から言へば、幼稚園でも鉛筆にする方がよろしい。又石筆にしても、鉛筆にしても、持ちやうをよく教へなければなりません。又首を曲げなければ、筆のさきの見えぬような姿勢をとらしめてはなりません。正しき姿勢をとらせることが必要です。

概して圖畫、習字、手工など、指の筋肉の練習は精神の疲れぬうちにするのがよろしい。一休大關節は、割合に運動しても疲れぬが、指の關節は疲れやすい。ですから多く運動したあとで指の練習を課するのはよくありません。

子供の知覺、觀念といふものは、以上申した、物を畫くこと、又は物を作りて見ることに由ていよくたしかめらるゝものであります。